

中学生の保育活動の体験についての検討

大泉 哲子

要約：いま保育所は、地域の福祉需要にも目を向けながら、もっと地域に根づく活動をすすめていくことが求められている。秋田県南秋田郡若美町中央保育所（町立 定員45人 所長船木満子）では、地元中学校に呼びかけて「中学生の一日保母活動」を2カ年にわたって実施した。

この活動の背景には、少子化、少家族化の進行とともに地域のつながりの希薄化が指摘されるなかで「保育活動を通して地域の連帯感を深めよう」というねらいがあった。この実践をとおして思春期を迎えた中学生が幼い子どもたちにどのように向かい合い、心を通わせ合うことができたのか、活動の記録、中学生の作文、保育所・学校の感想などから検討した。

見出語：「中学生の一日保母活動」、地域の連帯

研究方法：中学生の一日保母活動要綱をもとに中学校へ協力依頼をし参加生徒を募った。平成2年度の参加は女子11名、男子3名で各2日間ずつを割当てた。学校側では、この体験をボランティア活動として生徒に呼びかけをしたものである。なお期間は夏休みの中の一週間とし、時間は8時30分から15時まで、主な活動は、おやつ作り、じゃがいも掘り、プール遊び等、人数は1日4～5人とした。

保育所側の配慮として、園児には年長者との触れ合いを通じ心の豊かさと、たくましさをも身につけてもらい、中学生には園児との共通体験をもつことで、自分たちの育ってきた過程や環境を振り返り幼い子どもたちを理解してもらえんことをねらいとした。

結果：思春期の中学生が恥じらわずに園児とふれあうことができるか心配されたが、全員みずから志願しただけあって楽しみながら保母役を務めたことが、活動例、作文からもうかがわれる。

1) 活動例は表のとおり。

2) 作文（中1女子）～抜粋～

（参加動機）～2つの目的がありました。1つは小さい子どもたちとふれあうということです。大きくなるにつれて、小さい子どもとふれあうのは難しくなってくるからです。もう1つは、保育園の先生たちはどういう仕事をしているのか知りたいということでした。はたして、しっかりめんどうを見れるだろうかという心配もありましたが、はじめは、やっぱり、なかな

秋田県福祉保健部児童福祉課：Akita Pref., Department of Welfare & Health
Children's Welfare Division

か近づいてきてくれませんでした。でも時間がたつにつれて、周りに近づいてくれました。私達がジャガイモを切ってナイフで絵や模様をほってあげると、すごくよろこんで、赤、青、黄色などの絵の具をつけ紙やガラスにつけて遊んでいました。子どもたちは終わるとプールで体を洗って中に入ってきました。そして私達が洋服を着せてあげました。私は三日間でしたが、すごい体験をしたと思っています。～

3) 学校の感想：①予想しなかった希望者数で驚いた。②男子生徒の参加があり、保育園での体験をPRしたことで他の男子生徒に与えた影響は大きく来年も継続してくれるならば増えるのではないかと期待している。③体験発表から、「園児たちが始めはなかなかはじめなかったが時間をかけて接したら本当に仲良しになることができ楽しかった」「子どもたちが保育園でいろいろな体験をしているので驚いた」など素直な気持ちで受けとめていたようである。

4) 保育所の感想：3人の男子生徒の参加の持つ意義が大きい。活発さとやさしさをもち合わせていることに驚いた。年長男児は「保父さん」について回り、その一挙一動を真似ている表情が印象的である。

考察：活動が順調にすすんだ要因として、

- 1) 中学生が自ら志願したものであること
- 2) 期間中に教師も毎日保育園を訪ねるなど学校がわの協力が大きいこと
- 3) 男子の参加が活動内容に拡がりをもたせ園児にとって楽しい体験となったこと
- 4) 保育園児20数名(1歳～5歳)という小規模施設であり保母の手もとどきやすいこと。などが挙げられる。しかし、中学生を迎える保

母側にも迷いがあり、おやつの片付けや挨拶などのマナーに個人差があることなどについて実習生との違う対応の仕方に苦勞がうかがわれた。

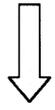
2年間の実践を通して、不安を抱きながらも幼児・中学生の双方に満足のいくつながりを見ることができる。今後について、若美中央保育所では、この活動を地域保育センター活動事業として継続することにしている。

秋田県では出生率向上策を重点施策として、「すこやかに生み育む環境づくり、兄弟・姉妹を増やすために」を掲げ、育児のしやすい環境づくりの各事業を強力に推進しようとしている。

こうした動きの中で、若美町の実践は、保育所に課せられている育児センターとしてのあり方を示唆するものとして評価されよう。

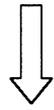
表 活動例

2年8月9日(木)晴れ	来訪者	高1年生 女子 3名 " 男子 2名 計 5名
	活動	・製作する(角、ジョウロ) ・水遊びをする
中学生の姿		こどもの反応
・いろいろな形の角、冷蔵庫など使ったアイディアの作品をたくさん作って供達を喜ばせる。		・朝、登園するなり「あそび」と中学生に声をかけられて機嫌。特に男子生徒に人気集中。離れようとしぬい。
・角に旗をつけたり「かず丸」など、ひとりひとりにネーミングし幼児の要求に応じ細やかな対応をしてくれる。		・中学生の製作完成をじっと待ったり、作ってもらった角を水に浮かべたり長い時間遊び込む。
・女子生徒3人で一巻の紙芝居の役を分けあい読み始め保母を驚かせる。		・普段少しの時間も止し出来ない未満児のY、Sの二人、男子生徒にだっこされ静かに紙芝居を静かに視聴することができた。
・男子生徒、未満児をだっこし女子生徒の読む紙芝居を静かに視聴する。		



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:いま保育所は、地域の福祉需要にも目を向けながら、もっと地域に根づく活動をすすめていくことが求められている。秋田県南秋田郡若美町中央保育所(町立定員45人所長船木満子)では、地元中学校に呼びかけて「中学生の一日保母活動」を2カ年にわたって実施した。

この活動の背景には、少子化、少家族化の進行とともに地域のつながりの希薄化が指摘されるなかで「保育活動を通して地域の連帯感を深めよう」というねらいがあった。この実践をとおして思春期を迎えた中学生が幼い子どもたちにどのように向かい合い、心を通わせ合うことができたのか、活動の記録、中学生の作文、保育所・学校の感想などから検討した。